

水稲新品種「宮崎7号」について

橘高昭雄・向井康・上野貞一・衛藤信男

(宮崎県総合農業試験場)

KITSUTAKA, A., MUKAI, Y., UENO, S. and ETO, N.

A New Rice Variety "Miyazaki 7 go"

水稲宮崎7号は昭和44年から宮崎県で奨励品種に採用され、通称名を「宮崎7号」として普及に移されることになったので、育成経過および特性の概要をのべて参考に供したい

来歴および育成経過

宮崎7号は昭和37年、宮崎県農業試験場において(十石×ヤマビコ)F₁を母、コシヒカリを父として交配し、同年晩期栽培でF₁を、翌年F₂~F₃を集団で世代促進し、39年個体選抜を行ない、以後系統育種法により選抜固定をはかったものである。昭和43年「宮崎7号」の系統名で県内に広く試作し地方的適否が検討され、その結果昭和44年に品種名「宮崎7号」として普及に移された。

特性の概要

1. 形態的特性、生育旺盛で、稈、葉身ともに大きい。出穂期から成熟期には直立型。稈長はコシヒカリよりやや短かく、穂の大きい、穂数の少ない中稈穂重型梗種。まれに短芒があり、稈先色は白、粒着中、脱粒性難。玄米は中形中粒で、心白、腹白はなく良質、食味もコシヒカリに比べ遜色がない。

2. 生態的特性、出穂、成熟期はコシヒカリより1~2日おそい。倒伏抵抗性は早期用品種の中では最強に属する。いもち病の真性抵抗性はPi-i遺伝子をもち、最も広く分布する病菌N₂レースには強度の抵抗性を示すが、N₁、Cレース等には罹病し、その時の圃場抵抗性は中位(コシヒカリ弱)である。紋枯病には中位、不時出穂性、耐冷性、穂発芽性もコシヒカリの長所を受けついでいる。生産力は極めて高く、コシヒカリ、越路早生より安全多収ですぐれている。

適地および奨励品種採用県

本品種は、コシヒカリの持つ長所を維持しながらいもち病、倒伏抵抗性を改良したもので、生産力が高く、宮崎県の早期栽培用および山間地の早生品種

として好適するものと考えられる。宮崎県ではコシヒカリ、越路早生、ヤマセニシキに替えて6000ha程度の普及が見込まれている。

第1表 一般特性

項目	宮崎7号	コシヒカリ
出穂期	7月6日	7月5日
成熟期	8月8日	8月5日
稈長(cm)	84	90
穂長(cm)	19.7	18.1
穂数(本)	16.1	22.2
芒の有無・長短	まれ・短	まれ・短
稈先色	白	白
脱粒性	難	難
倒伏抵抗性	強	弱
葉いもち抵抗性	強	弱
穂いもち抵抗性	やや強	弱
穂発芽性	難	難
苗代感応性	鈍	鈍
耐冷性	強	強
a 当り玄米重(kg)	44.4	40.3
玄米千粒重(g)	20.5	19.9
玄米品質	上下	上下
調査地	宮崎県総合農業試験場	
調査年次	S42, 43年平均	

第2表 コシヒカリに対する収量比(%)

(S42, 43年)

収量比	90~95	95~100	100~105	105~110	110~115	115~
個所数	1	3	5	7	6	5
平均収量指数	109.1%					

栽培上の注意

いもち病に対しては石狩白毛型の反応を示し、一般には強度の抵抗性を示すが、N₁、Cレースにはコシヒカリほどではないが発病するので防除に留意すること。コシヒカリより熟期がややおそく、穂も粒も大きいので、落水期が早すぎると登熟が不完全のまま止まり、品質が悪くなることがあるので、落水期が早過ぎないようにする。穂数が少ないので、健苗をつくること、若苗を浅植えするなど分けつ数を増やす工夫が増収につながる。

命名の由来

宮崎農試で育成したことに因む。